

“普通”の教員ができる教育相談

第1回

教育相談って何？

「みつつん」こと水野と、「のじのじ」と野近の二人で、「普通」の教員ができる教育相談のあり方を探っていく対談による連載です。一年間、よろしくお願ひします。

新学期は憂鬱 窓から落とされかける

みつつん 新学期が始まりますね。三月末から四月のゴールデンウィークまではてくてこ舞いで、猫の手でも犬の足でも借りたいくらいでしたね。

のじのじ いやあ、新学期はいつも憂鬱でした。どんな生徒がいるのかという不安もありますし、とにかく忙しい。初任のときは、新設の高校だったので、ほくも他の先生も新しい学校をつくるんだと燃えていました。ところが、廊下をバイク

で走るわ、教室で焚火をするわで、ほとんどの教師が生徒に殴られました。教育理念を振り回す教師全体への敵対心があつたように思います。ほくも、生徒にかつがれて、三階の窓から落とされそうになりました。二年目には校長も教頭も替わり、三年ほどで教師はほとんど転勤していった、その後は講師と初任者で埋めたいったそうです。

みつつん 先生稼業もいのちがけですなあ。のじのじが一年で転勤した学校に一年後にほくも赴任しましたけれど、そのときは「甘やかさず、切り捨てず」を合言葉に人権教育を土台に、学力保障をしなから、厳しい生活指導と面倒見のいい進路（就職）保障を柱にして、学校はずいぶん落ち着いていましたねえ。



人間中心の教育研究会会員

野近 和夫

のちか かずお 相談者の話す内容を批評しない。ただ「聴く」。このことに徹して40年。話すことが「気づき」につながるよう、常に念じています。元高校教諭。

私立中高スクールカウンセラー

水野 行範

みずの ゆきのり パーソンセントード・アプローチの立場で、エンカウンター・グループや非暴力トレーニングのファシリテーターをしています。元高校教諭。

のじのじ へえ、どんなマジックを使つたんですかねえ。
みつつん これは話すところと長くなりますので、別の機会にお話ししますね。

ありのままの自分でいよう

みつつん ところで、のじのじ自身、中学校のときから不登校やつたらしいですが、何で教育相談に関心を持ちましたんです

か。

のじのじ 一年目で教師をやめるつもりだったんですが、もうちょっとだけ続けようと、定時制高校に転勤させてもらったんです。授業中、じっとしていない生徒が多かったのは同じだったんですけど、休み時間に話しかけてくる生徒も多かったんです。中学校を出て働いている生徒は、仕事が終わってから学校に來ます。しんどい環境なので、話したいことがいっぱいあるんです。

みつつん のじのじ自身も、最初の学校で生徒の壁に直面し、挫折して変わったんですかね。

のじのじ 初任校は、「生徒になめられたらあかん」というんで、背広着てネクタイ締めて、「俺は先生や」という態度でした。とにかく、怒鳴ってでも、力で抑えてでも、授業をしなければならぬ。言うことを聞かせなければならぬ。それしか考えていませんでした。でも、四〇人のクラスの生徒のうち、聞こうとしているのは五人くらいでした。こんなに一生懸命授業をしようとしているのにうま

くいかないのは、生徒が悪いとか思っていないかったです。いつ殴られるのかわからないし、気を緩めてたらどんなことが起こるかかわからないから、いつも緊張していました。そんな感じの教師には誰も話しかけてきません。

定時制に行ってから、もう恰好つけるのをやめようと肩の力も抜いて、ありのままの自分でおろう、それでうまくいかなかったら教師やめようと思っていました。授業も、定時制では、教師を殴ろうと構えていないし、生徒も少ないので、落ち着いてやれました。だから、生徒も話しやすかったのかもしれない。

それに定時制の生徒にとって、学校は生活のほんの一部にすぎません。そこが全日制とは違うところです。生徒はほかのことをあまり教師として見ていなかったかもしれない。途中から「野近さん」と呼ばれるようになりました。

みつつん 「のじのじ」ではなくて。のじのじ 「のじのじ」は次の全日制に行っているからです。そのときも、「先生は、教師じゃないみたいやなあ」と生徒からよく

言われました。

みつつん 定時制ではどんな相談にのっていったんですか。

のじのじ 一番多かったのは、学校を続けるかどうかです。仕事が忙しくなって学校に來れないと言うのです。それから、会社の上司や先輩へのいら立ち、学校の先生や学校のやり方への不満なども多かったです。

ひたすら聞いてくれたらいい

みつつん 先生への不満など、どんな態度で聞いていたんですか。「これは指導せなあかんなあ」とか。

のじのじ いやあ、そんな発想はありません。「あなたの言い分はもつともやけれど、その先生によく言わんしねえ」と返すと、「言われへんことはわかっている。聞いてくれたらええねん」というわけです。「他の先生に何か働きかけてもらおう、解決してもらおうというのではない、本当に聞いてくれたらいいんや」ということは、何人かの生徒から言われました。

不思議なもので、三〇分とか四〇分とか聴いていると「あの先生、こんなひどいんよ」と言っていた生徒が「こういうところは俺も悪かったけどな」とか、勝手に言い始めるんです。聴くほうが肯定も否定もせずに相手の気持ちにそってとことん聴いていると、相手の視野が広がるというか、「自分もこういうところがあつたなあ」とか言い出すことに気づいていききました。

みつつん 現場でロジャーズの来談者中心の方法をやっていたんですね。生徒は答えを期待するのではなく気持ちを聴いてほしかった、ということですか。

つっぱついても弱い

のじのじ たぶん、そうやと思います。それに、暴走族とか非行傾向のある生徒が話しかけてくることも多くありました。見かけは元気で、最初は個別に国語を教えていても、いつの間にか「実はこういうことで悩んでいる」とか「族を抜けたい」とか。外見はえらそうに突っ張って

いるけれど、内面はコンプレックスを抱えて悩んだりしていることが、個別に話すことでわかりました。

若い先生の特権

みつつん ところで、聴くというのは教師にとつてなかなか難しいですよ。「教師というのは、指導して生徒を正しい道に導かなければならない。教育相談なんて甘っちょろい」と考える人もいます。若い先生に「最初は厳しく生徒にがつんと見せないで、一年間なめられるぞ」と助言するベテランの先生もいます。若い先生自身も、自分のことを「先生、先生」と連呼してみたり。

のじのじ 若い先生は、若いというだけで生徒が寄ってくるんですから、年の近い人間として話をじっくり聴いてあげればいいと思いますね。ぼくも最初の頃は他の先生から「甘やかしている」とよく批判を受けました。でも、高校生の頃、嘘ついて、学校サボって、親の金で映画見たりしていたほくからすると、定時制高

校の生徒は一六歳から働いて偉いなあといい気持ちがあるから、偉そうなことは言えなかつたんです。

一致していること

のじのじ 生徒たちが先生に腹を立てるのは、「こうしなさい」と言ってることと先生の行動が合っていないときなんです。**みつつん** 態度と行動が一致していないときですか。

のじのじ そこだけは一致させたいと思っていました。高校時代遊んできたのに偉そうに言えないし、しょっちゅう間違えているのに「こうせんとあかん」なんて言えないなあと思つたんです。

みつつん ぼくが初任のときのメッセージは「仲よろしうや」やったので、生徒たちからは「みつつん」と呼ばれてました。**のじのじ** 幸せな初任教やつたんですね。**みつつん** 「温泉」と呼ばれてましたから。だから一〇年後にのじのじが一年で去つた学校に転勤したときは、カルチャーシ

ヨックを受けましたね。生徒は落ち着いていて、教師が殴られることはありませんでした。と言っても、卒業式の後、仲間間の暴走族と一緒に校内をバイクでプウカブウカとクラクション鳴らして走り回ったりとかはありました。それに、生徒はほとんど手ぶらで登校します。授業が始まってもおしゃべりがやまないとか、言うことを聞いてくれないというのはありましたね。家庭訪問や企業訪問、生活指導や教科指導など、初任校の五倍は働いたと思いますが、教師としてずいぶん鍛えられました。

目の前の一人の人を大切にかなること

のじのじ ところで、みつつんが教育相談に関心を持ったきっかけは何だったんですか。

みつつん 初めて担任を持ったクラスで、不登校の生徒がいて、うつ病ということだったんです。生徒のことをもっと知りたいと思って、のじのじも通ったそうですが、民間のカウンセリング講座に通い

始めました。勤務後で疲れていたの、半分くらい寝ていましたけど。その講座で、ロジャーズのところに留学経験のある畠瀬稔さんの、一人ひとりを大切にするパーソンセンタード・アプローチ（PCA、人間中心）の話にひかれました。それで、畠瀬さんが、年末、有馬温泉でやり始めていた「教育のためのエンカウンター・グループ経験と人間中心の教育研修会」に毎年通うようになったんです。そこで、生徒が自分たちで授業を進めるとか、教育相談を授業や学級経営に活かしている実践を知り、「おお、これおもしろいなあ」ですわ。小グループで、参加者と何時間もゆったりと過ごしながら、「ありのままの自分で何かな」とか「この人はどんな気持ちでいるんやろうか」とか、いろいろと心理的な体験をしました。

のじのじ 今は、教育相談もいろいろな流派の影響を受けていますけど、出発はロジャーズの来談者中心療法でしたね。受容・共感・一致の三原則は、カウンセリング・マインドとして今も教育相談で強

調されていますね。

みつつん ロジャーズの非指示的カウンセリングなどはずいぶんと批判されたり、誤解されたりしていると思いますが、ロジャーズの問題意識は、その人の可能性や潜在力が発揮される場や関係性の条件とは何かということでした。カウンセリング・マインドは和製英語ですけれど、それだけ日本に定着していると言えるのかもしれません。どんな流派でも、相談に来た人を大切に傾聴して理解しようというの、共通していると思います。

のじのじ この連載では、学校教育相談のいろいろな問題を話し合っていますよ。新学期を迎える先生に何か贈る言葉、ありますか。

みつつん そうですね。ロジャーズは教育にも強い関心を持っていて、こんなことを言っていますよ。どの教師でも、生徒が表現した感情、言葉にした感情に対して、評価をしないで、受容的で共感的な反応を一日に一回やってみることを課題にするならば、現在ほとんどないこの種の理解の潜在力を発見するだろう、と。